

特別支援教育

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

知的障害教育

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	3
1	基礎研究	3
2	実践研究	3
3	検証方法	3
V	研究構想図	4
VI	研究の内容	5
1	基礎研究	5
2	実践研究	9
VII	研究の成果と課題	16

研究主題

児童・生徒にとって分かりやすい評価方法の検証 ～学習指導要領の3観点を意識した評価シートを用いて～

I 研究主題設定の理由

平成28年12月、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」の答申では、「子供たちの学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要」と示された。そしてこの答申について検討し、その議論を取りまとめた文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会による「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日）では、主体的・対話的で深い学びの視点から、「指導と評価の一体化」、「児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価」を一層重視すべきという指摘がなされた。

この背景には、学習評価についての様々な課題がある。上記の報告では、「評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない」、「教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい」、「評価のための『記録』に労力を割かれて、指導に注力できない」などの課題が指摘されている。本研究ではまず、これらの課題が知的障害教育の指導場面において実際にどのようなになっているのかを検討した。そして、「学習内容に対する自己評価が実際の達成状況よりも低い児童・生徒がいる」、「学習活動による評価となっており、学習指導要領を意識した指導や評価が十分ではない」、「児童・生徒の実態に応じた評価方法による、学習目標の達成度についての評価が必要である」ということが、対象とする児童・生徒の障害の程度の軽重や年齢にかかわらず、知的障害教育の現場に共通する現状であり、知的障害教育における学習評価の課題であるという認識に至った。

そこで本研究では、学習指導要領に示されている資質・能力の三つの柱（以下、三つの柱と表記）、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の内容を参考として、教科別の指導及び各教科等を合わせた指導の単元において、児童・生徒が学習する目標及び内容を明らかにすることが必要であると考えた。そして三つの柱に対応する学習評価の3観点による評価を行うために、本研究において、「学習指導要領の3観点を意識した評価シート」（以下、「評価シート」と表記。）を作成し、その活用の試行を重ねることで、活用しやすい「評価シート」への改善と使用方法の提案を行うこととした。

また、併せて、児童・生徒が、学習目標の達成度を理解することで、次の授業の学習目標を意識したり、意欲を高めたりすることができるようにするために、児童・生徒にとって分かりやすい評価方法が必要であると考えた。そのため、児童・生徒が学習内容の自己評価に取り組んだり、児童・生徒同士で学習目標の達成度を評価し合ったりするための「振り返りシート」等のツールの作成や、教員が授業内で児童・生徒に分かりやすく評価を返す方法について検討を行い、検証授業で成果検証を行うこととした。

以上のことを踏まえ、本研究では、「児童・生徒にとって分かりやすい評価方法の検証～学習指導要領の3観点を意識した評価シートを用いて～」という研究主題を設定した。

II 研究の視点

1 学習指導要領の各段階の目標に応じて指導内容を整理

本研究では、単元において児童・生徒が、特別支援学校学習指導要領における知的障害のある児童・生徒のための各教科において、どの段階の内容を目標にしているのかを把握できるように、学習指導要領に示された三つの柱の内容から単元の目標や指導内容を整理し、指導計画及び評価計画を立てることとした。そして、学習目標に対する学習状況の評価の返しを行うことで、各教科の指導目標や内容を意識した評価の有効性を検討することとした。

学習評価とは、学校における教育活動について、児童・生徒の学習状況を評価するものである。「児童・生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、児童・生徒自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようになるためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性をもった形で改善を進めることが必要である。

また、児童・生徒の学習状況を評価するに当たっては、児童・生徒一人一人がその時間の目標をどこまでどのように達成したかということだけではなく、前時の学習からどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。

2 3観点による学習評価

現行学習指導要領では、「知識・理解」、「技能」、「思考・判断・表現」、「関心・意欲・態度」の四観点が設定されているが、今後、各教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理した新学習指導要領の下での指導と評価の一体化を推進する観点から、観点別学習状況の評価の観点についても、これらの資質・能力に関わる「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を整理して示すことが求められる。

本研究では、単元の指導内容及び目標が、学習指導要領のどの段階とつながっているのかを「評価シート」に記載することで、教員が児童・生徒に身に付けるべき力をいつでも簡単に確認できるようにしており、さらに、チームティーチングに入る教員にも分かりやすく伝えることができるようにしている。

3 児童・生徒にとって分かりやすい評価

学習目標に対する到達度の評価に関して、実際の到達状況と児童・生徒自身の評価とが著しく異なる場合がある。自己評価が実際の到達状況よりも低い場合もあれば、高すぎる場合もある。前者の場合は、到達状況が自分より高い他者と比較していること、後者の場合は、課題で求められている評価の基準を正確に把握できていないことなどが要因として考えられるが、どちらの場合においても共通していることは、自分の学習状況を客観的に把握することができていないということである。そのため、自己の学習状況を客観的に適切に認識できるようにしていくことが重要となる。

また、適切な自己評価は自己肯定感の向上につながることから、児童・生徒にとって分かりやすい評価方法を検討することが必要である。

そこで、本研究では、学習した内容を分かりやすく、児童・生徒に伝える方法として、「振

り返りシート」や映像等を用意し、児童・生徒自身が何を学び、何ができるようになったかを分かりやすく評価できる評価方法を検討し、その成果を検証することとした。

Ⅲ 研究仮説

学習指導要領に示された目標の三つの柱に対応する学習評価の3観点に即し、児童・生徒に伝わる学習状況の評価を行うことで、児童・生徒は、学習目標や学習の達成度が分かり、学習目標の達成がより促されるだろう。

Ⅳ 研究方法

1 基礎研究

研究仮説を検証するための基礎研究として、次のことを行うこととした。

- (1) 参考文献の分析
 - ア 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（平成30年3月）
 - イ 学習評価の在り方ハンドブック小・中・高等学校編（国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和元年6月）
 - ウ 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（文部科学省 平成31年3月）
- (2) 分かりやすい評価方法の検討
- (3) 特別支援学校の学習指導要領を参考とした評価規準表（案）の作成

2 実践研究

- (1) 「評価シート」の作成
- (2) 検証授業（「評価シート」を活用した事例研究）

3 検証方法

検証方法は次のことを行うこととした。

- (1) 対象とする学習グループの児童・生徒の授業において、学習指導要領に示された目標・内容の三つの柱に基づき、学習評価の3観点で整理した「評価シート」を作成する。
- (2) 「評価シート」の活用を含め、児童・生徒に分かりやすい評価の方法を工夫する。
- (3) 学習した内容を分かりやすく児童・生徒に伝える評価方法として、児童・生徒の実態に応じて「振り返りシート」等のツールや映像による授業記録などの客観的な資料の活用を検討し、実施する。

V 研究構想図

共通研究テーマ：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

現状と課題	関連法令・施策等
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習内容に対する自己評価が実際の達成状況よりも低い児童・生徒がいる。 ・ 学習活動による評価となっており、各教科の学習内容を意識した指導や評価が十分ではない。 ・ 児童・生徒にとって分かりやすい評価方法による、学習目標の達成度についての評価が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校教育法第72条 特別支援学校の目的 ○ 特別支援学校学習指導要領 ○ 特別支援学校学習指導要領解説 総則編 ○ 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 ○ 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編 (文部科学省 平成29年4月)

児童・生徒にとって分かりやすい評価方法の検証 ～学習指導要領の3観点を意識した評価シートを用いて～

研究の視点
<ol style="list-style-type: none"> 1 学習指導要領の各段階の内容に応じて指導内容を整理 2 学習評価の3観点による評価 3 児童・生徒にとって分かりやすい評価

研究の仮説
<p>学習指導要領に示された目標の三つの柱に対応する学習評価の3観点到に即し、児童・生徒に伝わる評価を行うことで、児童・生徒は、学習目標や学習の達成度が分かり、学習目標の達成がより促されるだろう。</p>

研究の方法	
<p>【基礎研究】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①参考文献の分析 <ul style="list-style-type: none"> ・ 知的障害特別支援学校学習指導要領 ・ 学習評価の在り方ハンドブック小・中・高等学校編 (国立教育政策研究所作成) ・ 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(文部科学省 通知) ②学習した内容を分かりやすく児童・生徒に伝える評価方法の検討 	<p>【実践研究】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学習指導要領の目標の三つの柱に対応する学習評価の3観点到に基づいた評価シートの作成・改善 ② 検証授業 3回 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「評価シート」を活用した事例研究 9月から12月までに9事例

検証の方法
<ul style="list-style-type: none"> ・ 対象とする学習グループの児童・生徒の授業において、学習指導要領で段階的に示された目標・内容に基づき、学習評価の3観点到で整理した評価シートを作成・改善する。(各教科等を合わせた指導については、指導の形態別に評価を行う。) ・ 評価シートの活用も含め、児童・生徒に分かりやすい評価の方法を工夫する。 ・ 学習目標の達成度や、児童・生徒の学習への取組み具合の向上について、評価シートの記入結果や、授業観察記録などの客観的な資料から判断し、評価シートの有効性と活用方法について検証する。

VI 研究の内容

1 基礎研究

(1) 参考文献の分析

ア 「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説各教科等編」の確認・整理

表1 各教科における三つの柱に基づく内容の表記箇所

内容における 三つの柱		知識及び技能	思考力、判断 力、表現力等	学びに向かう 力、人間性等	※注意事項
生活		(イ)	(ア)	記載なし	
国語 外国語活動・外国語		観点別の表に 整理	観点別の表に 整理	記載なし	記号…目標 (記号)…指導事項 ○記号…具体的事項
社会		㊦	㊦	記載なし	(記号)…指導事項
数学 算数・ 数	A～D	(ア)	(イ)	記載なし	記号…指導事項 ○記号…具体的事項
	[数学的活動]	(イ)	(ウ)	(ア)	記号…指導事項
理科		(ア)	(イ)	記載なし	記号…指導事項 ○記号…具体的事項
音楽	A、B	(イ)(ウ)	(ア)	記載なし	記号…指導事項 ○記号…具体的事項
	「共通事項」	イ	ア	記載なし	(記号)…指導事項
作 画 工 美術	A、B	(イ)	(ア)	記載なし	記号…指導事項
	「共通事項」	(ア)	(イ)	記載なし	記号…指導事項
体育・保健体育		ア	イ	ウ	
職業	A	ア(ア)、イ(ア)	ア(イ)、イ(イ)	ア(ウ)	○記号…具体的事項
	B、C	ア	イ	記載なし	
家庭		(ア)	(イ)	記載なし	記号…指導事項

大まかに異なる点を示すと、「生活」、「音楽」「図画工作・美術」では、内容で示されている(ア)の事項が「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力になっており、(イ)の事項が「知識及び技能」の資質・能力になっている。

イ 「学習評価の在り方ハンドブック 小・中・高等学校編」(国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和元年6月)の確認

特別支援学級・特別支援学校では、学習活動に対する評価を行いがちであるという課題がある。例えば、買い物学習に対して、「上手に買い物できた」という評価は、活動に対する評価であり、児童・生徒が学習した内容に対する評価にはなっていない。特別支援学校の学習指導要領上の、生活科の「ク 金銭の扱い」や算数科・数学科の「A 数と計算」に示された学習内容のどの内容を取り扱ったのかを明らかにし、それに対して評価を行うことで、児童・生徒の学習目標に対する評価となる。

特に生活単元学習などの各教科等を合わせた指導においては、広範囲に各教科の内容が取り扱われることに留意し、各教科等の中から指導する内容を明確にして指導することで適切な評価を行うことが大切であると考えた。

「学習評価の在り方ハンドブック 小・中・高等学校編」(国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和元年6月)では、学習評価の基本的な考え方として、学習の成果を的

確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、児童・生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であるとされており、教員の指導改善のための評価と児童・生徒にとって分かりやすい評価の二つの視点をもって研究を進めることが必要であると考えた。

また、観点別学習状況の評価について、学習指導要領に示された目標に照らし合わせて、その到達状況がどのようなものであるかを観点ごとに評価し、児童・生徒の学習状況を分析的に捉えるものと示されており、それぞれの評価の方法として、次のような内容が記されている。

「知識・技能」の評価方法としては、事実的な知識の習得と、知識の概念的な理解のバランスに配慮する。また、実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくこと等も考えられる。

「思考・判断・表現」の評価方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れるなど評価方法を工夫することが考えられる。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法としては、ノート等における記述、授業中の発言、教員による行動観察や、児童・生徒による自己評価や相互評価等の状況を考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。また、「主体的に学習に取り組む態度」は、「関心・意欲・態度」と同じ趣旨だが、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価ではなく、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨が改めて強調されている。

これらのことから、三つのそれぞれの観点から設定された評価規準や評価方法を明確にして取り組むことが大切である。

ウ 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（文部科学省 平成 31 年 3 月）の確認

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（文部科学省 平成 31 年 3 月）では、「4. 学習評価の円滑な実施に向けた取組について」に次のように示されている。

- (1) 各学校においては、教員の勤務負担軽減を図りながら学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、学校全体としての組織的かつ計画的な取組を行うことが重要であること。
- (2) 学習評価については、日々の授業の中で児童・生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であること。したがって観点別学習状況の評価の記録に用いる評価については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要であること。
- (3) 観点別学習状況の評価になじまず個人内評価の対象となるものについては、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要であること。

参考文献の分析を踏まえ、教員間で偏りが起きないように評価規準を明確にするとともに、何ができているかがはっきり分かるように評価を行うことが重要であり、それが可能となるよう、教員間で共通認識をもつために「評価シート」を共有することは有効であると考え。また、評価する方法が教員の負担にならないように、「評価シート」は、「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説各教科等編」の目標・内容の一覧を参考にして作成するようにする。そして、見取った評価を児童・生徒の実態に応じて、分かりやすい評価の方法で伝えていくことが大切であると確認した。

(2) 学習した内容を分かりやすく児童・生徒に伝える評価方法の検討

特別支援学級と特別支援学校、また各学部や学年の発達段階の違いから、児童・生徒に対して、一律に同一の評価方法を用いることは困難かつ妥当ではないと考え、児童・生徒の実態によって評価方法は様々に行うべきであるという結論に至った。その一方で、「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)」(平成30年3月)の目標・内容の一覧を参考にして評価規準を作成することで、評価をする内容について明確化されるのではないかと考えた。

また、それを基にしたシートを作成・活用することで、児童・生徒に対する評価の返しにも活用できるのではないかと考えた。評価を返す方法については、「振り返りシート」を使った記述による自己評価、「◎、○、△」などの記号や色付きのマグネットを使った評価、できている部分を口頭で伝える評価、授業の様子を撮影し、その映像を見せての評価など児童・生徒の実態に応じて行うこととした。また、評価する場面についても、授業の最後のまとめの時間だけでなく、1単位時間にいくつかの学習がある場合には、その学習ごとに行うなど、実態に応じた方法で行うことにした。

(3) 特別支援学校学習指導要領を参考にした評価規準表の案の作成

児童・生徒に身に付けるべき内容を明確にするとともに、3観点による評価を行うために、特別支援学校の学習指導要領の目標・内容の一覧を参考に評価規準表の案(表2)を作成した。

表2 特別支援学校学習指導要領を参考にした評価規準表の案（高等部 数学を抜粋）

観点	高等部・1段階	高等部・2段階
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ・整数、小数、分数、概数の意味と表し方や四則の関係について理解し、整数、小数、分数の計算についての意味や性質を理解し、計算している。 ・図形の形や大きさが決まる要素や立体を構成する要素の位置関係、図形の合同や多角形の性質について理解し、図形を作図したり、三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積を求めたりしている。 ・比例の関係や異種の二つの量の割合として捉えられる数量の比べ方、百分率について理解し、目的に応じてある二つの数量の関係と別の二つの数量とを比べたり、表現したりしている。 ・データを円グラフや帯グラフで表す表し方や読み方、測定する結果を平均する方法について理解し、問題解決において用いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・整数の性質、分数の意味、文字を用いた式について理解し、分数の計算についての意味や法則について理解し、計算している。 ・平面図形を縮小したり、拡大したりすることの意味や、立体図形の体積の求め方について理解し、縮図、拡大図を作図したり、円の面積や立方体、直方体、角柱、円柱の体積を求めたりしている。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、目的に応じて表や式、グラフを用いて変化や対応の特徴を考察したり、比例の関係を前提に二つの数量の関係を考察したりしている。 ・目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して、表やグラフに的確に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を批判的に捉え考察したりしている。
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目し、数の比べ方や表し方を統合的に捉えて考察したり、数とその表現や数量の関係に着目し、目標にあった表現方法を用いて計算の方法を考察したり、数量の関係を簡潔に、また一般的に表現している。 ・図形を構成する要素や図形間の関係に着目し、構成の仕方を考察したり、図形の性質を見いだしたりし、三角形、平行四辺形、ひし形の面積の求め方を考え、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導いている。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、その変化や対応の特徴を表や式を用いて考察したり、異種の二つの量の割合を用いた数量の比べ方を考察したりしている。 ・目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して、表やグラフに的確に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数とその表現や計算の意味に着目し、発展的に考察して問題を見だしたり、目的に応じて多様な表現方法を用いながら、数の表し方や計算の仕方などを考察したりし、数量の関係を簡潔かつ一般的に表現している。 ・図形を構成する要素や図形間の関係に着目し、構成の仕方を考察したり、図形の性質を見いだしたりし、円の面積や立方体、直方体、角柱、円柱の体積の求め方を考え、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導いている。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、目的に応じて表や式、グラフを用いて変化や対応の特徴を考察したり、比例の関係を前提に二つの数量の関係を考察したりしている。 ・目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して、表やグラフに的確に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を批判的に捉え考察したりしている。
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・図形や数量、データの活用について数学的に表現・処理することを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えようとしたり、数学の良さに気づき学習することを生活や学習に活用しようとしたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図形や数量、データの活用について数学的に表現・処理することを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えようとしたり、数学の良さに気づき学習することを生活や学習に活用しようとしたりしている。

3 実践研究

(1) 評価シートの作成

「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編」で段階的に示された目標・内容に基づき、「評価シート」を作成することにした。児童・生徒の実態に合わせた評価が行えることと、実際に使用するに当たっての作成負担のバランスを考慮し、一枚のシートで児童・生徒を評価することができ、授業を実施するために役立つ資料となるような「評価シート」の作成を検討した。

その結果、「評価シート」の形式は、各教科別の指導の場合、各教科等を合わせた指導の場合及び評価を記述で表した方がよい音楽、図画工作・美術のような芸術系の教科の場合と3種類ある方が使用しやすいと考えた。

「評価シート」を活用することにより、各教科別の指導はもとより、各教科等を合わせた指導においても、児童・生徒が身に付けるべき内容が分かりやすいものになる（表3）。

また、音楽、図画工作・美術のような芸術系の教科の「評価シート」（表4）は、単元の中で内容や時間で評価規準を変え、各児童・生徒の様子を記述していくことで、その変容から評価していくことが有効ではないかと考えた。

そして、この「評価シート」に基づいて、児童・生徒が自己評価を行う際の「振り返りシート」を作成することで、児童・生徒にとっても、学んだ内容がより具体的に示され、実際の到達状況に近い自己評価が行えるようになると考えた。

表3 各教科等を合わせた指導の「評価シート」例（小学部 生活単元学習「集団遊び」）

	単元の評価規準	各教科につながる評価規準 (教科名の丸数字は段階)			A 児	B 児	…
		生活②	算数①	音楽②			
ア 知識・ 技能	○動きやリズムを覚えて友達と一緒に身体を動かしている。 ○遊びのルールやきまりが分かる。	生活②	ゲームについてのルールやきまりを知る。				
		算数①	自分のチームの色や形を意識して集める。				
		音楽②	関わり遊びの時に声に出して歌をうたう。				
		体育③	音楽に合わせて楽しんで身体を動かす。				
イ 思考・ 判断・ 表現	○勝ち負けを意識して、ゲームを行っている。 ○活動の順序や順番を守って、活動を行っている。	生活②	自分の順番が分かり、順番通りに活動する。				
		国語②	簡単な指示や説明を聞いて活動する。				
		算数①	数をかぞえ、数の大小で勝ち負けが分かる。				
ウ 主体的に 学習に取 り組む態 度	○友達を誘ったり、積極的に友達と関わったり、協力したりしようとしている。	国語③	相手に伝わるように友達を誘う。				
		体育②	友達と一緒に道具を使ったゲームに取り組む。				

表4 芸術系の教科指導の「評価シート」例（高等部 音楽）

生徒 (高等部 1段階)	評価規準 【第2次】第2～4時（3時間）		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	リズムパターンを繰り返し連続して演奏できる。	3拍子のリズムに乗り、生き生きと躍動感をもってリズムパターンを演奏している。	舞台に立つことを意識し、ふさわしい態度で演奏に臨んでいる。
A			
B			

(2) 検証授業

ア 検証授業① (知的障害特別支援学校小学部)

(7) 授業の概要

生活単元学習 学習指導案			
対 象：第6学年 9名			
単 元 名：「先生カルタを作ろう」			
単元の目標：インタビューをしてカルタを作る活動を通して、人との関わり方を知る。			
単元の評価規準：			
ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に 取り組む態度	
・インタビューに必要な言葉やサインを身に付け、表現している。	・身に付けた表現方法を活用して、いろいろな教員にインタビューをしてまとめている。	・インタビューをしたことを基に、進んで先生カルタを作ったり遊んだりしている。	
単元の指導計画 (12時間扱い)：			
時	主な学習内容・活動		
第1時～第2時	・インタビューの仕方を知り、身近な教員先生にインタビューをする。 ・カルタについて知り、遊ぶ。		
第3時～第10時 (本時は第4時)	・言葉やサインを使って、学校の教員先生にインタビューをする。 ・インタビューをしたことを、カルタにまとめる。		
第11時～第12時	・作った先生カルタを使ってみんなで遊ぶ。		
授業の展開 (全10時間中の第4時間目)：			
	主な学習内容・活動	指導上の留意点・配慮事項	評価方法
導入 5分	挨拶 本時の説明	・授業のはじまりを意識する。 ・本時の見通しがもてるようにする。	
展開 35分	・インタビューの実施 ・カルタの作成 インタビューしたことを役割に分かれて、カルタを作っていく。	・インタビューのポイントを一つずつ丁寧に提示して、イメージをもたせる。 ・できることを中心とした活動内容を設定し、自信をもって取り組めるようにする。 ・完成したものを見合い、達成感を感じられるようにする。	・即時評価 ・友達同士での評価 (観察)
まとめ 5分	・振り返り、挨拶	・本時を振り返り、良かったことを伝える。 ・次時に向けて、期待が高まるようにする。	・他者評価 (動画)

(イ) 研究について

インタビューを通して人との関わり方を知る術を知り、実際に練習したことを、人に発信して「聞く」ということを学習する。児童にとって分かりやすい評価方法として、①児童が撮影された自分の姿を映像で見ることで自分自身や他者を客観的に見ること、②一人ずつの目標を決め、できていたら花丸シートにカードを貼ることを行った。また、教員は、「評価シート」を活用した評価を行うことで、分かりやすい評価を児童に伝えていくようにした。

表5 評価シート

単元の目標：インタビューをしてカルタを作る活動を通して、人との関わり方を知る。			
観点	教科	段階	各教科の評価規準
ア	国語	小学部2段階	インタビューを通して、身近な人への会話に慣れ、言葉やサインが、気持ちや要求を表現していることが分かる。
イ	国語	小学部2段階	身近な教員に挨拶をしたり、簡単な台詞や身振りなどを表現したりしている。
ウ	国語	小学部1段階	インタビューしてきた内容を言葉や絵カード等で表すことによさを感じ、言葉や絵カードを使おうとしている。
	算数	小学部1段階	カルタの取った枚数に気付き、カルタ遊びに関心をもって取り組もうとしている。

(ウ) 結果

【A児】

簡単な言葉やサインを使えるようになったことを映像を通して繰り返し客観的に評価することで、目標を理解し、身近な人からの話しかけに応じて答えることができるようになった。

【B児】

初めてのことに對して自信がなかったが、花丸シートにカードを貼る場面を客観的に見ることによって評価されている行動が分かり、他者に関心をもって言葉で伝えられるようになった。

【全体として】

児童にとって分かりやすい評価を繰り返し行うことで、児童自身が、授業の中で自分のやるべきことが分かり、提示する目標を少しずつ理解できるようになった。

(エ) 考察

本授業での対象児童は、できていた部分を口頭や態度で評価することが効果的である。また、活動の様子を映像で撮影し、客観的に自分自身や友達の様子を見ることで、評価の観点を繰り返し確認することができた。また、花丸シートにカードを貼る活動を通して、到達状況を可視化することで、児童自身に「できた」という感覚を味あわせることが可能となり、活動に対する意欲につなげることができた。

教員にとっては、「評価シート」を作成することで、学習指導要領の各段階の目標・内容に基づいた教員側の評価の視点がより明確になった。授業前の段階では、児童によって目標を考え、どの程度まで達成させるか、また、授業後には、授業を振り返る際に、どこまでできるようになったかを教員側で評価する材料として活用することができた。授業毎に児童の到達度を明確に把握することが可能となり、指導に生かすことができると考える。

イ 検証授業②（小学校特別支援学級）

(7) 授業の概要

体育科 学習指導案			
対 象：第1～6学年 24名			
単 元 名：「ひまわりランドで楽しもう ～いろいろな運動遊びに挑戦～」			
単元の目標：・運動の行い方を知り、基本的な動きを身に付ける。 ・運動して楽しかったことや感じたことを表現する。 ・運動遊びに進んで取り組む。			
単元の評価規準：			
ア 知識・運動	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度	
基本的な体づくり運動の楽しさを感じ、その行い方を知り、基本的な動きを身に付けている。	基本的な体づくり運動の楽しみ方を工夫する。楽しさや感じたことを他者に伝えている。	運動遊びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、場の安全に気を付けたりしようとしている。	
単元の指導計画（10時間扱い）：			
時	主な学習内容・活動		
第1時	・ひまわりランドで行う運動の種類や取り組み方を知る。		
第2時～第4時	・ひまわりランドの以下の場で運動遊びをする。 ①ミニハードル等 ②平均台等 ③手押し車等		
第5時～第7時 (本時は第7時)	・ひまわりランドの以下の場で運動遊びをする。 ①立ち幅跳び等 ②キラキラボール等 ③綱引き等		
第8時～第10時	・ひまわりランドの以下の場で運動遊びをする。 ①ゴム跳び等 ②ケンパー等 ③フラフープ等		
授業の展開（全10時間中の第7時間目）：			
	主な学習内容・活動	指導上の留意点・配慮事項	評価方法
導入 7分	・挨拶、流れの確認、準備運動	・見通しがもてるようにする。	
展開 36分 (12分 ×3回)	・体づくりの運動遊びをする。 ※場を順番回る順番の例 ①立ち幅跳びに挑戦 ・めあてタイム ・運動タイム ・振り返りタイム ②キラキラボールに挑戦 ・めあてタイム ・運動タイム ・振り返りタイム ③綱引きに挑戦 ・めあてタイム ・運動タイム ・振り返りタイム	・全体を5グループに分け、三つの場をローテーションで回るようにする。 ・それぞれの場毎にめあてタイムと振り返りタイムを設定しグループで行う。	・児童の発表 ・教員による観察 ・振り返りボード（自己評価）
まとめ 2分	・整理運動、全体の振り返り、挨拶	・前向きに発表できた児童を賞賛する。	

(イ) 研究について

特別支援学級の体育の授業で、児童が実態に応じた自己評価を行うこと、指導者が指導に活用できる評価を行うことを目指して本単元を計画した。

「評価シート」(表6)

は、教員が授業内や授業後に行う。児童の実態の幅が大きいことを考慮し、特別支援学校の2、3段階、小学校学習指導要領の第1・2学年に合わせて評価規準を設定した。

表6 評価シート

観点	段階	段階毎の評価規準(5時～7時)
ア	小学部2段階	支援を受けながら、楽しく立ち幅跳び、キラキラボール、綱引き等を行うことができる。
	小学部3段階	立ち幅跳び、キラキラボール、綱引き等の運動の楽しさを感じ、その行い方を知ることができる。
	小学校第1学年及び第2学年	立ち幅跳び、キラキラボール、綱引き等の基本的な動きを身に付けることができる。
イ	小学部2段階	教師の助言等を受けながら、いろいろな遊び方(動き方)を工夫する(見付ける)ことができる。
	小学部3段階	いろいろな遊び方(動き方)を工夫することができる。
	小学校第1学年及び第2学年	いろいろな遊び方(動き方)を工夫するとともに、友達に伝えることができる。
ウ	小学部2段階	簡単なきまり(スタートのタイミング等)を守り、安全に運動することができる。
	小学部3段階	綱引きで急に力を抜かない等、きまりを守り、友達と仲良く安全に運動することができる。
	小学校第1学年及び第2学年	グループの友達を応援したり、一定の時間集中して取り組んだりすることができる。

当該児童がどの段階まで達成できているのか明確にできるようにした。

「振り返りシート」

(表7)は、児童が授業内で行う。グループごとの「振り返りシート」になっており、担当の教員と共に取り組んだ場ですぐに振り返りを行う。

表7 振り返りシート

ひまわりらんど ふりかえりシート ○○先生チーム			()回目 月 日			
名前	たちはばとび など		キラキラボール など		つなひき など	
	めあて	ふりかえり	めあて	ふりかえり	めあて	ふりかえり
A児 ○年						
B児 ○年						
めあてをきめよう		めあてをきめよう		めあてをきめよう		
①うでをまえにふる		①ちかくのまををしっかりねらう		①きゅうにちからをぬかない		
②とぶまえにひざをまげる		②とおくのまををしっかりねらう		②あきらめないでひっぱる		
③ちやくちのときかおをあげる		③たかいまををしっかりねらう		③ともだちときょうりよくする		

めあての設定は児童が選択するという形になっている。振り返りは、3段階(◎、○、次回は頑張る)の中から児童が判断する。児童は、用意されたマグネット(◎は赤、○は緑、次回は頑張るは青)を選び「振り返りシート」に付けることで自己評価を行う。

(ウ) 結果

回を重ねる中で、めあてを意識して運動できる児童、適切に振り返りができる児童が増えた。めあてを設定することで、運動面や思考面にも良い変化が見られるようになった。自己評価を色分けしたマグネットで行うことで、書くことが苦手な児童も負担なく振り返りを行うことができた。達成できなかったときは、△ではなく、次回はがんばる、という設定にしたため、自己評価が低い児童も前向きに振り返りをすることができた。教員は、評価シートがあることで指導すべきことをMTとSTの教員が共通理解することができた。

(エ) 考察

めあての選択ができるようになった児童は、今後少しずつ自分でめあてを考えることも目指していく必要がある。評価シートには段階毎の評価規準を設定し、有効な部分があった。他の教科等でも活用することができると考える。

ウ 検証授業③ (中学校特別支援学級)

(7) 授業の概要

生活単元学習 学習指導案			
対 象：第1～3学年 7名 単 元 名：「5組カフェで地域の方をおもてなししよう」 単元の目標：地域の方を5組カフェにお招きし、気持ちの良い接客とおいしいスイーツで おもてなすことができる。 単元の評価規準：			
ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度	
<ul style="list-style-type: none"> 情報収集及び情報を整理する方法を理解し、活用している。 調理実習に必要な材料を的確に計量し、レシピに従って調理している。 	<ul style="list-style-type: none"> 表現を工夫し、お客様が「行ってみたい」と思うようなチラシを作り、宣伝している。 気持ちの良い挨拶と丁寧な言葉でおもてなしをしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 役割分担に基づき、友達と協力してカフェを運営しようとしている。 	
単元の指導計画 (17時間扱い)：			
時	小単元名	小単元の目標	
第一次 (第1時～第4時)	おもてなしメニューを決めよう	友達と協力してメニューを決め、試作し、レシピや盛り付けを決定することができる。	
第二次 (第5時～第7時)	5組カフェPR大作戦～チラシ作り～	行ってみたいと思ってもらえるようなPRを考え、チラシを作ることができる。	
第三次 (第8時～第11時)	接客スキルを身に付けよう	気持ちの良い挨拶でお客様を迎え、正しく注文を取るなどの基本的な接客ができる。	
第四次 (第12時～第13時)	必要な物品を準備しよう	カフェ開店に必要な物品を自分たちで考えて用意することができる。	
第五次 (第14時～第17時)	5組カフェで地域の方をおもてなししよう	役割分担に基づいて自分の仕事を遂行し、5組カフェを運営することができる。	
授業の展開 (第三次 全17時間中の第10時間目)：			
	主な学習内容・活動	指導上の留意点・配慮事項	評価方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 前時のふりかえり 本時の目標 	<ul style="list-style-type: none"> ふりかえりシートを活用する。 学習内容を確認し、時系列に活動を掲示。 	
初めて出会う方に「笑顔ではっきり正確に」接客ができる。			
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> 基礎練習 表情筋エクササイズ 発声・発音練習 接客実践練習① (ペア) 接客実践練習② (お客様) 	<ul style="list-style-type: none"> 練習には映像を活用する。 手鏡を使って口元を見るよう指示する。 仕切りを立ててカフェを再現する。 教師の実演ビデオで活動内容を確認し、目標を再度意識させる。 アドバイス表を基にペアへの助言を促す。 ペアからのアドバイスを生かして実践練習②に取り組むよう声をかける。 参観者6名にお客様役になっていただく。 タブレット型端末で接客の様子を動画撮影する。 	<ul style="list-style-type: none"> 見取り即時評価 ペアでの相互評価 (アドバイス表の活用)
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ふりかえり 動画視聴 シート記入 (次時の目標) 	<ul style="list-style-type: none"> 数人の実演動画を全体で見て、よかったところを伝え合うよう声を掛ける。 各自自分の接客の様子を動画で確認し、次時の目標を立てるよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価 (動画・注文票)

(イ) 研究について

1学期の5組カフェで生徒はカフェ活動の流れに慣れ、自ら必要な仕事等を考えて行動できるようになっている。そこで今回は新規のお客様をおもてなしすることで、スキルを発展的に活用し、より実社会に即した学習として深めることを目指した。

本研究の仮説に基づき、学習に即した評価を行うため、生活単元学習における各教科の目標を明確化し「評価シート」(表8)を作成した。同時に、生徒にとって分かりやすい評価方法の工夫として、発達段階を考慮し、「振り返りシート」(図1)の作成及び相互評価と動画による自己評価を実施した。「振り返りシート」は1時間ごとの仕様にし、「評価シート」の内容に結び付けた自己評価欄を設け、教員の評価と併記する形にした。

表8 評価シート

第三次 接客スキルを身に付けよう(第8時~第11時)			
気持ちの良い挨拶や正しい言葉遣いでお客様をお迎えし、正しく注文を取るなどの基本的な接客ができる。			
観点	教科	段階	各教科の評価規準
ア	国語	中学部 2段階	聞き取りやすい発音を心がけ、話すスピードや声の大きさに気を付けて話すことができる。
	職業	中学部 2段階	接客においてよく使う表現を覚え、適切に活用することができる。
イ	国語	中学部 2段階	お客様の注文を聞いてメモをとったり、必要に応じて聞き返したり確認したりしながら正しく聞き取ることができる。
ウ	国語	中学部 2段階	気持ちの良い挨拶や接客について考え、実行しようとしているか。
	職業	中学部 2段階	働くことの意義を理解し、接客スキルの向上に進んで取り組もうとしているか。

③ 今日の目標

初めて出会う方に「笑顔ではっきり正確に」接客ができる。

	自分	先生
笑顔	□	□
はっきり 声の大きさ、スピード、発音、接客用語	□	□
説明、注文、提供の正確さ	□	□

↓

次の目標

図1 振り返りシート

(ウ) 結果

「活動→相互アドバイス→活動→自己の動画確認」という活動の繰り返しの中で、友達・お客様・教員・自分という多面的な評価を受けることで、目標に対しての自己の達成度を生徒自身が客観的に判断できるようになっていく過程を見取ることができた。生徒Aは「もう少しはっきり話すとよい。」とペアからアドバイスを受け、その後の活動を動画撮影したものを確認した際、「これが自分？全然聞き取れない。」と発言した。他人のアドバイスと、自己の認識が合致した瞬間である。ペアの活動を評価することで、同じように他者の立場で自己を評価する視点が見えたとも言える。「振り返りシート」には最終的な自己評価と教員からの評価を記録し、生徒はそれを基にして次時の目標を見いだすことができていた。

(エ) 考察

自己の達成度や課題の認識を高める方法として、今回検討している「評価シート」、「振り返りシート」及び動画による振り返りは、中学生にとって有効であったと言える。

「評価シート」は、各授業の目標を明確化し、それを達成していくことで単元の目標を達成できるという仕組みを作るのに役立つ。各教科を担当する教員との連携や教員同士の評価の共通認識に有効であり、さらに「振り返りシート」作成の根拠とすることができる。

また、「振り返りシート」において、自己評価欄と教員の評価欄を併記することで、生徒自身が規準を学ぶことにつながる。教員や友達からの評価に加え、自己で動画を確認しながら自分の中に適切な評価規準を取り入れることで、第三者の視点をもって自己を振り返る力が伸びていくことになる。自己評価のしやすい活動においては、積極的に活動ごとに生徒に振り返りを促すことが効果を上げると考えられる。

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 児童・生徒にとって分かりやすい評価方法について

「評価シート」は、単元または題材の評価規準を児童・生徒個々の評価規準に具体化して表記できる。これにより、評価する内容が明らかになり、児童・生徒にとって分かりやすい学習評価の返し方の工夫がより行いやすくなった。

いくつかの検証授業においては、この「評価シート」を踏まえ、言葉の表現等を児童・生徒の実態に応じて、児童・生徒が自己評価や他者評価をするための「振り返りシート」等のツールとして試行した。児童・生徒が、「できたこと」を適切に評価する場面や「他者のできたことや課題点」を適切に評価できる場面を確認することができた。

(2) 指導内容の明確化

ア 「評価シート」の開発・活用

「評価シート」は、評価の観点ごとの単元または題材の評価規準をさらに分析して、児童・生徒一人一人に応じた評価規準を表記できるようにした。これらの評価規準と学習指導要領に示されている各教科等の指導内容との関係が一目で分かるような書式にしたことで、段階の異なる児童・生徒が在籍するグループの指導においても、児童・生徒が身に付けるべき内容を明確にして指導及び評価を行うことができた。

イ 各教科等を合わせた指導における指導内容の明確化

「評価シート」の開発・活用によって、各教科等を合わせた指導においても、単元または題材の評価規準と学習指導要領に示されている指導内容との関係が明確になった。このことによって、学習指導要領に示された内容につながる学習評価をしやすくなった。

(3) 教員間の連携

複数の教員で指導にあっている学習活動（チームティーチング等）において、「評価シート」を教員間で事前に確認することで、重点となる評価のポイントや指導内容を共通理解することができ、指導する教員の違いによる学習評価の差異をなくすことができた。

2 研究の課題

(1) 各教科等を合わせた指導の場合、指導内容が多岐になるため、「評価シート」に多くの評価規準が表記されることになるが、各教科等の指導内容の寄せ集めにならないよう留意しなければならない。生活単元学習や作業学習といったそれぞれの指導の形態の特性に応じて、教員が重点とする評価規準を挙げやすい「評価シート」の開発を検討する必要がある。

(2) 学習指導要領に則した評価をさらに分かりやすく伝える方法として、児童・生徒の実態に応じた分かりやすい学習評価の段階（スモールステップの評価規準）を示した「評価シート」の作成を、作成・使用頻度とのバランスから検討することが必要である。

平成 31 年度 (2019 年度) 教育研究員名簿

特別支援教育・知的障害教育部会

学 校 名	職 名	氏 名
足 立 区 立 足 立 小 学 校	主任教諭	○糟 谷 壮 紀
奥 多 摩 町 立 古 里 小 学 校	主任教諭	中 村 学
多 摩 市 立 和 田 中 学 校	主任教諭	大 野 真 弓
東 京 都 立 水 元 小 合 学 園	主任教諭	藤 崎 研 二
東 京 都 立 足 立 特 別 支 援 学 校	主任教諭	真志喜 良 一
東 京 都 立 久 我 山 青 光 学 園	主任教諭	小 田 達 夫
東 京 都 立 田 園 調 布 特 別 支 援 学 校	主任教諭	梶 谷 祐 子
東 京 都 立 石 神 井 特 別 支 援 学 校	主任教諭	丹 沢 茂 樹
東 京 都 立 羽 村 特 別 支 援 学 校	指導教諭	◎鈴木 誠 治

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部特別支援教育指導課

指導主事 加藤 宏昭

平成 31 年度(2019 年度)
教育研究員研究報告書
特別支援教育・知的障害教育

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849